

スティグマの相互行為的マネジメントと

文化的構成の研究

(研究課題番号：16530336)

平成16年度～17年度  
科学研究補助金（基盤研究(C)）研究成果報告書

平成18年3月

研究代表者 中河 伸俊  
(大阪府立大学人間社会学部教授)

# I. 相互行為場面におけるスティグマ——排除と包摂をめぐる感受概念の経験的有用性と実践的インプリケーション——

中河 伸俊

## 1. 課題の所在

スティグマ (stigma) という歴史の古いことばを、社会的な排除と包摂をめぐる人びとのいとなみを記述し考察するための道具として再生させたのは、周知のとおり、カナダ人の社会学者、アーヴィング・ゴフマンである (Goffman 1963)。このタームは、以来、社会学だけでなく、社会心理学、社会福祉学、人類学、差別論、障害学、医療研究、エスニシティ研究、ジェンダー研究などさまざまな分野で、ハンディキャップを抱える人たちの困難な状況を解明し、その状況を改善する方途を探ることを目的とする研究のキーワードとして、頻繁に用いられてきた。

しかし、そうした諸研究の多くは、ゴフマンのスティグマをめぐる考察の、画期的な特徴に十分な目配りをしてはこなかった。たとえば、それはとりわけ当初は、逸脱の社会学における“ラベリング理論”(大村・宝月 1979; 中河 2000)の一翼として取り扱われてきたが、そうした位置づけは、権力関係(社会構造)とレッテル貼りというモチーフを呼び起こし、一貫して具体的な社会的場面の中でのコミュニケーションと相互行為に照準を合わせるというゴフマンの方針のメリットを見えなくしてしまう。いっぽう、社会心理学の分野では、スティグマというタームは、従来のステレオタイプ論の文脈の中で、認知や意識(とりわけ偏見(Adorno et al. 1950; Allport 1954; Crocetti, Spiro and Siassi 1974))やパーソナリティに引き寄せて理解されがちだった。そのようにして、心理学的に切り縮められたスティグマ概念は、政策レベルでは、「どうやって偏見を持つ人の意識を変えるか」という啓発モデル(佐藤 2005)を帰結する。そして、そうしたモデルに依拠した教育実践はこれまで、いくつかのテーマについては、公教育の場などで精力的に行われてきたが、必ずしも期待通りの大きな成果をあげてきてはいない。

本報告書での共同研究は、スティグマ現象を構造にも心理にも還元せず、文化的な言説資源を用いた日常的なやりとり(相互行為)とコミュニケーションの中で、スティグマが立ち現れたり立ち現れなかったりする過程に注目するという、ゴフマンの研究関心に立ち戻ったところから考察を進める。そうすることで、独自の考察の水準を、排除と包摂をめぐる議論に付け加えることができる。「どのように相互行為のアレンジメントや環境を変えれば、スティグマのマネージメント(管理もしくは操作)、つまりは排除や特別扱いに関わるマーカー(しるし)の実践上の克服が可能に(あるいはたやすく)なるか」というのがそれである。スティグマと社会構造についての研究は、立法や行政をめぐる提言や施策に結びつき、スティグマの社会心理をめぐる研究は、啓発教育をめぐる提言や施策に結びつくだろう。しかし、それらがかりに効果的だったとしてもなお、相互行為のレベルでの設問は重要である。なぜなら、スティグマは、ゴフマンが説得的に示したとおり、すぐれてやりとりとコミュニケーションの水準に属する事柄だからである。

この章では、以上のような立場から、スティグマ現象の社会学的考察に必要な方針と展望を示すために、理論的な基礎作業を行なう。最初に、ゴフマンの所説の基本枠組みを再

確認する。次に、スティグマ研究のその後の展開を見、そこから導かれるいくつかの課題を検討する。最後に、やりとりのレベルでのノーマライゼーションというスティグマ研究の応用的展望に触れる。筆者は、他の多くの有用な社会学のタームと同じく、「スティグマ」もまた一種の感受概念<sup>i</sup>だと考える。つまり、この語を、客観主義的に同定可能な単一の事柄のクラスを指すものだと考えず、人びとのいとなみの個別的な詳細を報告し考察するための一つの便宜だとみる。これは、いいかえれば、「登校拒否をしている生徒が外出先を選ぶとき」や「ホームレスの人が緊急援助機関でインタビュー面接をうけるとき」、「不妊の女性が同窓会で同級生と家庭の話をするとき」、「精神疾患で入院歴がある人がつてを頼って求職活動をするとき」、あるいは、「マルチエスニック（多民族）状況にある地域の職場で、低威信のエスニック・グループのメンバーと高威信のエスニック・グループのメンバーとが同僚になるとき」といった多種多様な状況の、すべてにあてはまるスティグマの一般理論を追い求めないということである。スティグマ論は、さまざまな時と場所で行なわれる排除や包摂のいとなみの個別的な詳細に敏感になり、そこで行なわれる人びとのやりとりの方法や戦略をより適切に理解するための、足がかりやヒントを提供してくれるにすぎない。

## 2. スティグマと状況の中の自己——出発点としてのゴフマン

ゴフマンの『スティグマの社会学』は、先行する『行為と演技』(Goffman 1959)で展開された人びとのやりとりとコミュニケーション<sup>ii</sup>についての考察と洞察を、逸脱と排除というある意味で極端な現象にあてはめた、一種の応用編とみることができる。ゴフマンは『行為と演技』で、一言でいうと「見せる」ことと「隠す」ことを主要なモチーフにして、その考察を組み立てた。人びとが身体的に居合わせる共在 (co-presence) の場で、「見せる」ことと「隠す」ことを通じて、人びとはそれぞれが何者であるかを示しあい、またお互いに承認しあい、それを通じてそれぞれの自己 (self) を成り立たせる。いいかえれば、人びとが共在の場ではほぼ途切れることなく示しつづける「自己」(自分は何者かという定義もしくは identification) は、身も蓋もないいい方をすれば、開示 (呈示) と隠蔽からなる情報ゲームの効果の一つにすぎないということである。人は、隠れ蓑を着たり透明人間になったりできないから、他の人たちの面前では、容姿や服装や行いなど多くのことを見られざるをえない。とはいえ、「自分をさらけだす」という慣用表現とは裏腹に、自分についてのありとあらゆることを他人に見せるということもまた、物理的にも論理的にもありえない。つまり、「個人情報」の完全な開示も完全な隠蔽もありえないから、「見せる」ことは必然的に「隠す」ことであり、「隠す」ことは取りも直さず「見せる」ことであらざるをえない<sup>iii</sup>。

こうした事のしだいをゴフマンは、『行為と演技』の冒頭で、「人は、記号・搬送媒体 (sign-vehicles) であり、他の人と同じところに居合わせるとき、意図する・しないに関わらず、他者に印象 (impression) を与える」といういい方で定式化した。印象を与えたり与えられたりするという情報ゲームは、「人それぞれ」のまったくランダムな事柄ではない。その場がどういう場であり、自分や他の人は何者であり、その場で何をしているのか (また何をすること期待されているのか) についてのアウトラインを提供する「状況の定義」<sup>iv</sup> が、自分についてのくさぐさを他者に見せ、他者についてのくさぐさを読み取る作

業 (つまりコミュニケーション) の文脈になる。「見せる」と「見える」、いいかえれば意図的表出と非意図的表出は連続体であり、だから人は、非意図的だと思われる表出を操作して、自分にまつわる何かを「違ったように見せる」、すなわち擬装を行なうこともできる。表出には、統制しやすいと思われるもの (たとえば会話の中身や記号的な仕草や服装) と統制しにくい (あるいは統制できない) と思われるもの (たとえば体つきや表情や声音や涙) とがあり、そして、後者の擬装は (それが可能であるならば) 前者の擬装より効果的である。

人は、やりとりの場において、状況にとって適切であるか、少なくとも極端に不適切ではない存在であることを求められている。それは、そのようにふるまうことが、共在の場、つまり複数の人が居合わせる場面を、その場にいる人たちにとって「わけが分かる」ものにし、そこで行なわれる社会的活動を円滑に進めるための前提条件だからである。そうした意味で、ある状況の定義を維持することと、自分がその状況の定義にみあった適切な人であるように「見せる」もしくは「見える」(ゴフマンのことばを使うなら「状況にとって適切な自己を呈示する」) こととは、状況への参与者にとって、一種の道徳的な責務 (規範的期待) だといっている。だから、人は、やりとりの場面で、お互いにフォローしあって状況の定義を守ろうとし、その一環として、他者の自己 (面子; Goffman 1967) を保護しようと努める。ゴフマンの「演技する人間」のモチーフに沿っていうなら、人前で自分を何者かに「見せる」行為者 (actor/performer) には、二つの顔がある。一つは、状況の定義とやりとりの秩序の保護にたずさわるといいうわば愛他的・協働的な行為者としての顔であり、そして、もう一つは、そうした情報統制の作業を通じて自己利益をはかろうとする利己的・戦略的な行為者 (Goffman 1969) としての顔である<sup>v</sup>。ただし、やりとりの場面 (状況) を成り立たせることが、私たちがその場でそれに沿って何者かでありうるための大前提である以上、両者のうち社会生活の組成において基本的なのは、前者のほうだと考えていい<sup>vi</sup>。

要するに、人は、見せることと隠すこと通じて、その場面に合った何者かとしての役柄を演じる。この見せる部分を、ゴフマンは外面 (front) <sup>vii</sup> と呼ぶ。外面や楽屋裏を共有して見かけ (自己呈示) を維持するために特段の連携をしあう仲間をゴフマンはチームと呼び、自己呈示をして自分を何者かに見せようとするときに念頭に置かれる、「見せる」相手をオーディエンス (観客・聴衆) と呼ぶ。私たちは観念的・抽象的な他者 (たとえば神や超自我やミードのいう一般化された他者 (Mead 1934) のような) ではなく、面前の具体的な人間をオーディエンスに想定し、その人たちに「向かって」自分を「見せる」<sup>viii</sup>。「見せる」際に隠されるのは、それを見せることによって、その場で示されている自己の定義が危うくなりそうな情報<sup>ix</sup> である。それを包み隠すには、本人による表出と情報の統制や、舞台装置の仕掛けや、チームメイトのサポートだけでなく、オーディエンスの分離もしばしば (たとえば家族にとって「だらしないおとうさん」である人も、家族がいない診察室では患者さん相手に「てきばきとして抜かりのない医師」としての自己呈示をスムーズに全うできるといったぐあいに) 効を奏する。

以上のようなゴフマンのコミュニケーションと相互行為へのアプローチの特徴を再確認しておく、そのスティグマ論の画期性・有用性が理解しやすくなる。有名な彼のスティグマの定義<sup>x</sup> は、それだけでは、ある種の人の属性は、それを帰属された人を「ふつうの人 (normals)」と区別し、排除や見下しや攻撃の対象にするための指標として使われる可

能性があるという、比較的ありふれた（ラベリング理論と同じ）ことをいっているにすぎない。『スティグマの社会学』でより重要なのは、そうした「負」の属性は、それを示すし（徴候またはサイン）の読み取りを通じて、特定の具体的な個人が「持つ」ものとして立ち現れるという、スティグマという語の起源と不可分な指摘である。つまり、ゴフマンのスティグマ論のキーワードは可視性（visibility=見えるということ）である。『行為と演技』での「見せる」「隠す」をめぐる情報ゲームの論点が、『スティグマの社会学』では、パッシングやカヴァーリングや内集団への所属やカミングアウトといった、スティグマを抱えた人がとりうる戦略の選択肢に形を変えて再登場する。

では、スティグマ属性のしるしが可視的である（五感を通じてそれと知覚できる）とは、どういうことか。たとえば、電話を通じてのやりとりの中では、相手の肌の色<sup>xii</sup>や視覚の障害は分からないといったように、コミュニケーションのテクノロジーや舞台装置が可視性を左右する部分もある。しかし、共在の場での可視性を考えるにあたって、もっとも重要なのは、「ふつうである」ということだ。スティグマ的属性があるということと「ふつう」でないというのは同義であり、そして、どちらもそれだけでは同じく内容的には無規定である。しかし、具体的な状況の中、つまりやりとりの場面では、そこがどんな場であり、そこにどんな人たちがおり、その人たちの間にどんな関係があり、そこで具体的にどんな活動が行われ、どんな舞台装置やコミュニケーションの手段が利用可能かによって、その場なりの「ふつう」が成立する。つまり、何が「ふつう」かは状況依存的である。

とはいえ、何か「ふつう」である、あるいは状況にとって適切であるとは、単に「ふつうでないようには見えない」というだけのことにすぎない。そして、人は、日常的には、そうではないと思える特段の事情や徴候がないかぎり、人やその行いや出来事や場面そのものを「ふつう」だと想定する<sup>xiii</sup>。こうした「ふつう」を背景にして、スティグマのしるしは、読み取られたり読み取られなかったりする。やりとりの場面と相対的だとはいえ、スティグマのしるしには、見えやすいものもあれば、見えにくいものもある。ゴフマンが示した、嫌悪感を引き起こす身体上の特徴（abominations）、個人的な性格の汚点（blemish）、人種や国籍や宗教などに準拠した「部族的」なもの、というスティグマ的属性の三区分に固執しなければならない理由はないが、そうやって概括してみただけでも、そうした属性の見えやすさの度合いがさまざまであることが分かる。あるやりとりの場において見えなかったスティグマ属性は、しかし、見えなかったからといって「ない」（つまりその後のやりとりにおいて見えるようになる可能性がない）わけではない。人びとへの属性（カテゴリー）帰属のかなりの部分は、たとえば性別や親族内での位置や学歴や職業のように、制度的活動と常識的推論に裏打ちされ、個人情報として「ある」（つまり継続的に利用可能な）ものになっている。これは、スティグマ的属性の多くについてもあてはまる。したがって、やりとりの中でスティグマのしるしが識別されず、やりとりの相手やその他のオーディエンスが「ふつう」の想定に依拠して行動しているとき、スティグマ的属性の持ち主は、それを意図していてもいなくても（Goffman 1963 邦訳: 125）、「ばれる」可能性を抱えた（ゴフマンの用語によれば discreditable な）存在にならざるをえない<sup>xiii</sup>。

スティグマ的属性が、つねに排除や見下しの引き金になるわけではない。むしろ、私たちは多くの場合、先述のように愛他的・協同的な行為者として、やりとりの場やそこで達成される活動や場の参加者の自己についての定義を守るために、そうした属性やそのしるしを無視したり正常化したりしようと試みる<sup>xiv</sup>。しかし、そうしたときにも、ゴフマン

のスティグマ属性をもった人と常人（もっていない人）の間の相互行為における気まずさについての鋭い指摘（ibid. 邦訳: 36）が示すとおり、「ふつう」の想定と「ふつうでない」属性とのジレンマがしばしばやりとりを制約する。さらにいえば、ゴフマンは本書では明示的に論じてはいないが、「ふつう」の見かけやコミュニケーションの仕方と、その場での活動への「ふつう」の（適切な）参与（その中には適切に参与していることを態度で示すことも含まれる）、および参加者の「ふつう」の人としてのアイデンティティ（自己の定義）は相互に裏付けあっており、したがって、このうちのどこかで「ふつう」の想定のあるところが「見つかった」とき、ふつうさへの疑念は他の部分にも波及しうる。これは、見かけやコミュニケーションの仕方をめぐる制約やハンディキャップの問題が、従来（とりわけ社会構造や偏見の議論において）考えられてきた以上に、スティグマ現象の組成に重要な役割を果たしているということの意味する。

### 3. スティグマ研究のその後の展開

ゴフマンは、人目を集めるテクニカル・タームと視角を次々世に問いつづけた研究者であり、一種の試論として世に問われた『スティグマの社会学』のあと、自身がこのテーマに立ち戻ることはなかった。その後、スティグマの研究はさまざまな分野で行なわれつづけてきたが、と同時に、このタームはしばしばゴフマンの所説の枠組みを離れて一人歩きすることになった。その後のスティグマをめぐる研究の傾向は、大まかにいえば、四つのタイプに整理して概観できるだろう<sup>xv</sup>。

第一に、冒頭に述べたように、ゴフマンの所説を逸脱の社会学におけるラベリング理論と同一視して、互換的なものとして取り扱う立場がある（Scheff 1966; Suchar 1978; 大村 1979; Schur 1980; 石川 1985; 坂本 1986; Link and Phelan 2001; Falk 2001）。ラベリング理論には、(1)レッテル貼りの過程を権力関係の問題に還元する傾向（その結果「逸脱を作り出す」公的機関や専門家の活動に研究の焦点が合わせられ、当人の自己呈示ややりとりのダイナミズムはなおざりにされがちだった）、(2)ラベル=ことばというイメージにとらわれてレッテル貼りを言語（のみ）による過程として理解しがちな傾向、そして、(3)レッテル貼りを対象や相互行為的な文脈から切り離して「火のないところに煙をたてる」ことが可能な過程<sup>xvi</sup>として概念化する傾向がある。いっぽう、ゴフマンにとって、スティグマ的属性は、ある意味で、ラベリング論がレッテル貼りとしてとらえるような行い以前に「すでにそこにある」のであり<sup>xvii</sup>、そのしるしの読み取りをめぐる隠蔽と開示の情報ゲームと、その相互行為的な環境とがテーマ化される。そして、そうしたゲームの考察にあたっては、言語的な記号だけではなく、五感に訴えるもの（たとえば服装、容貌、しぐさ、なまり、発話の不明瞭さ、匂いなど）や、物理的な舞台装置や小道具（たとえば車椅子や住居のロケーション、その景観など）にも目配りがなされる。つまり、ラベリング理論への吸収は、スティグマ論の長所である強い具体性への志向を水泡に帰させかねない。

第二の行き方として、スティグマ研究の心理学化、つまり人の「心の中」との関わりでスティグマにアプローチする動きを挙げることができる。たとえば、スピッカーは、ゴフマンの所説は認知の過程のみを見、当事者の感情の問題を無視しているとして、スティグマを抱える人たちの心の傷とそのケアという新しいテーマを示した（Spicker 1984, 内田 2002）。スティグマの社会心理学的な研究は多角的に進められているが（たとえば、Jones

et al. 1984; Crocker 1999; Heatherton et al. 2000)、その中には、オーソドックスな差別意識論やステレオタイプ論にスティグマという語を冠しただけのケースもある (Herek 1998; Pinel 1999)。『スティグマの社会学』には、たしかに社会心理学的な読みを許す部分もなくはないが、ゴフマンという社会学者 (あるいは人類学者) の画期性が、相互行為の秩序と其中で読み取られる表出 (expression) を生涯のテーマにし、それを人の内面と直接に関連づけるタイプの説明を一貫して排した点にあったことを、くどいようだが再確認したい。

第三に、当然ながら、エスノグラフィックな事例調査やインタビュー調査を通じて、ゴフマンに忠実に、さまざまなスティグマ属性を抱えた人びとの印象 (個人情報) の管理や道徳的キャリアを調べたり、それを踏まえて分析枠組みの拡充を試みたりする研究も米国においては少なくはない (たとえば、Schneider and Conrad 1980; Miall 1986; Gardner 1991; Blum 1991; Shaw 1991; Angrosino 1992; Herman 1993; Nack 2002)。たとえば、シュナイダーとコンラッドは、症状が出ていないときには見えにくい「かんについて、当事者は、(1)自分の病気についての情報を選択的に隠す、(2)支援的な人に対して、自己イメージを高め気を軽くするために治療的 (therapeutic) にそれについての情報を開示する、(3)特定の相手の考えや態度を変えさせようとして、いわば予防的に、自分の病気またはこの病気一般についての情報を開示する、という三つの情報統制の戦略をとることを示した。また、石川は、日本では数少ないスティグマ論を実用したフィールド系研究の一つ (石川 2003) で、「ひきこもり」をしているとされる若者の外出 (および非外出) 行動が、じつはパッシング (通過作業=スティグマ属性を開示せずふつうの人としてふるまうこと) という補助線を引けば整合的に理解可能になることを示した。

第四に、スティグマ属性をめぐる歴史的な研究がある。負の性格付けをされた人びとのカテゴリー (ゴフマンのいう部族的なスティグマ) や、病気や罪や落ち度といった個人に帰属される不具合 (ゴフマンのいう個人的な blemish) のカテゴリーは、特定の時期に生まれ、それに結びつくさまざまな知識や慣行、活動、出来事等の変化とともに、定義や意味内容を変えてきた。カテゴリーのスティグマ化や脱スティグマ化、たとえば、マリファナ喫煙が犯罪や嗜癖として法や医学によって定義されるようになったり、あるいは同性愛を精神病理ではなく一つのライフスタイルとして理解されるようになったり、といった過程も、そうしたカテゴリーの意味づけ (つまりは使われ方) の変遷の一齣である。もちろん、一言でスティグマ的といっても、それがどんなふうにも負の属性であり、どのような理解に基づいて隠されるべきものと考えられるのかは一様ではないから、異教徒から民族を類廃させる劣等な血の継承者へ (ナチス体制でのユダヤ人の定義の変化) といったぐあいに、スティグマ属性自体も変化しうる。こうした変遷は、医療化 (medicalization) という新しいテーマを立ち上げた『逸脱と医療化』(Conrad and Schneider 1980)をはじめ、社会問題の構築主義的研究 (中河 1999)、フーコーにはじまる言説史もしくは系譜学的研究 (Foucault 1961; Hacking 1995; 赤川 1999) においてそれぞれのやり方でテーマ化されている。ゴフマンの課題設定を継承した第三のアプローチは、それだけでも成り立ちうるが、しかし、特定のスティグマ属性をめぐる現象の可能性や幅の理解に、歴史研究 (とりわけ系譜学的研究) が役立つ側面もある。この点については、次節でさらに述べる。

管見では、スティグマ研究の今後の展開の有望な選択肢の一つは、エスノメソドロジーの知見に学ぶことである。やりとりの中でスティグマ属性のしるしが読み取られるとき、

その鍵になるのはカテゴリー化の実践である。カテゴリー化は、スティグマ現象に限らず、社会生活の組織化の基本になる行いだ、ゴフマンはその行いについて、必ずしもシステムティックに考察を進めてはいなかった。近年、成員カテゴリー化分析 (MCA) というエスノメソドロジーの分析方針 (Hester and Eglin 1997; 中河 2005) が成果をあげ始めているが、上の第三のアプローチのスティグマ研究を、このMCAの知見に照らして再構成していくことで、ときに印象主義と図式主義に流れる傾きがあったこの系統の研究の骨組みを、より人びとの実際のやりとりに即したものにしていけることができると考える。

スティグマ論とエスノメソドロジーの対話の歴史は古い。ガーフィンケルは、『エスノメソドロジー研究』所収のトランスセクシュアルの (男性のものとされる生物的身体を持ちながら女性としてふるまう) 人物を対象にした「アグネス」論文の中で、ゴフマンのパッシング概念はゲーム・モデル的であり<sup>xviii</sup>、具体的な場面の中での持続的な達成としてのパッシングの性質を見落としした単純なモデル化だと批判した (Garfinkel 1967)。「自然な (ふつうの) 女」としてパスしつづけることは、既製の「女らしさ」の文化的なシナリオを身につけて演じるといったやり方では達成されない、とガーフィンケルはいう。その場その場で、そこで行われているゲームは何なのかを見つけ、そのゲームをやりながらそのゲームのルールを学ぶというのが、アグネスのパッシングのあり方だった。エスノメソドロジー系統の研究には、スティグマをについて考えるのに有益なものとして、さらに、「ふつう」の行いや態度・属性との対照を相互反映的 (reflexive) な形で積み重ねて「ふつうでない」個人を作り出す (特定の個人にスティグマ属性を帰属させる) という、記述 (カテゴリー化) 実践の一つの方法を同定したスミスの知見がある (Smith 1978)。

ゴフマンの「ふつうの見かけ」についての考察を生かしつつ、エスノメソドロジー的なカテゴリー化についての知見を潜った野心的な試みが、鶴田によるトランスジェンダーのパッシングの研究である (鶴田 2004)。鶴田は、社会的世界を基本的には一瞥で読みとられるものとするゴフマンの理解を足がかりにして、他者が何者であるかを「見る」識別作業には、「一瞥による判断」と「帰納的判断」の二つの種別があるとみる。前者は、一目で「おかしい」あるいは「ふつうでない」と見えなければその行いや人や事物や出来事は「ふつう」なものである (もしくはそのようなものとして取り扱い可能である) という日常的な想定に基づいた識別 (identification) のあり方であり、後者は、一見して「何か (歴然とまたは微妙に) おかし」見えてしまったとき、どこがおかしいのか、その行いや人や事物や出来事は「ほんとうは」何なのかを、その対象についての断片的情報をモニターし帰納的 (および相互反映的) に集約しながら探り当てていくような識別のあり方である。ガーフィンケルは、アグネス論文で、パッシングを持続的な達成として描き出したが、そこで示されているのは、『「誰もが女だと思いに違いない」「…」』『ノーマルな外見 [ふつうの見かけ——筆者]』をすでに持つ者が、女ではないと『帰納的判断』されないように、いかに上手く立ち振舞ったのかということであったと言える (ibid.: 24)。これは、ゴフマンの議論とガーフィンケルの議論の位置関係の整理として、説得力がある。公共空間でのパッシング (Gardner 1991) か、より密接な関係の中でのパッシングかによってある程度事情は変わってくるだろうが、しかし、一瞥のレベルで「疑いをもたれないようにすること」がトランスジェンダーのパッシングの要諦だという鶴田の知見は、「見えにくい」スティグマをめぐるいとなみについての私たちの理解を組み立てるにあたって、重要な指摘だと思われる。

スティグマ属性とゴフマンが呼ぶような社会的カテゴリー (成員性カテゴリーと属性記

述カテゴリー)は、エスノメソドロジー的ない方をするなら、相互行為(やりとり)のリソース(材料)である。そして、そうしたさまざまなカテゴリー(「不良」、「おたく」、「つっぱり」、「幼児性愛者」、「娼婦」、「ホームレス」、「朝鮮人」、「精神障害者」から「抵抗勢力」や「テロリスト」、「非国民」まで)は、一般的な語義としては負のコノテーションを持つ(ことがある)といえるが、それらは、やりとりの場において自動的に、「ふつう」でないことの指標として利用され、排除や見下しや排斥といった行いにつながるわけではない<sup>xix</sup>。スティグマ的なカテゴリー化が、そうした形で利用されるかどうかは、具体的な状況の定義とやりとりのダイナミクスによる。ゴフマンのスティグマの定義(注x参照)が、くスティグマ属性を持つ者とは、やりとりとコミュニケーションの現場において、それを持つ者が「ふつうの人」ではない信頼を失った存在として扱われる可能性がある者である<sup>></sup>という、カテゴリーの内実についての規定が空っぽな一種のトートロジーの形をとるのも、彼がこのことをよく弁えていたからである。

たとえば、そのようにやりとりの文脈を設定すれば、他のところではスティグマの指標になりえないマーカー(たとえば瞳の色; Peters 1987)も、「われわれとは違うかれら」の識別基準になりうる。語弊のあるいい方だが、ある意味で、指標は何でもいいのだ。状況の定義やローカルな知識や「常識」による“制約”があるとはいえ、なおかつ、ある場面において利用可能なスティグマのカテゴリーはしばしば数多くある。とすれば、スティグマ的とされるカテゴリーの性質ではなく、やりとりの中でどのようなカテゴリー化の方法が使われ、どのような関係構成のダイナミクスが展開されるかに目を向けることが、「ふつうではない」存在を作り出す機軸の理解にとって、決定的に重要だろう。この課題に正面から取り組んだのが、佐藤の『差別論』(2005)である。

「だれでもすねに傷の一つや二つはある」という意味では、スティグマ属性を持つ者と「ふつうの人」を連続体として捉えることにも一理はあるが(「常人—スティグマ保有者統一体」; 柄本 1992)、しかし、相互行為レベルに立ち現れるスティグマ現象は、不連続体である。つまり、個別の具体的なやりとりの場面では、スティグマ的とされるカテゴリーが「われわれ」と「かれら」の区分の指標として使われるか使われないか、排除が達成されるかされないかのどちらかなのである。佐藤は、個人へのスティグマ属性の帰属の十全な相互行為的達成は、「差別行為」、つまり、「ある基準を持ち込むことによって、ある人(々)を同化するとともに、別のある人(々)を他者化し、見下す行為」によって口火を切られると考える(ibid.: 65)。こうした行いは、それをする中でスティグマ帰属過程の口火を切る「差別者」と、他者化され(つまり「われわれとは違うかれら」として位置づけられ)見下される「被差別者」、そして、差別行為によって同化されて「差別者」と同じ「われわれ」に属するように働きかけられる「共犯者」の三者関係に立脚して成立する。

以上の構図(独自の三者関係図式として日本の差別論の領域では以前から知られていた)から、佐藤は、仮説的な差別行為の類型論<sup>xx</sup>を導き出すが、その妥当性は今後の経験的吟味に委ねられるべきものである。「被差別者」の他者化と見下しにウェイトが置かれるにせよ、「共犯者」の同化にウェイトが置かれるにせよ、差別(スティグマ帰属)が達成されるためには、「共犯者」(ゴフマン的にいえばオーディエンス)に対して「差別者」から同化メッセージが送られ、「共犯者」がそれを識別し受容して、明示的あるいは暗黙裡に自身が「差別者」と同じ「われわれ」に属することを是認しなければならない。同化メッセージは独特の本来的なあいまいさを伴うが(ibid.: 101-106)、しかし、主観的な(参与者個々

人の解釈しだいの)ものではなく、経験的に捕捉可能な相互行為的現象である。そうでなければそもそも、「共犯者」が「かれらとは違うわれわれの一員だよ、あなたは」という同化メッセージを読み取ることができず、差別現象そのものが成り立たない。佐藤は、こうした同化メッセージは、連鎖的な機制を伴うと示唆する。本書のとくに先端的な試みの一つは、会話分析と成員性カテゴリー化分析に触発された、同化実践のかなめとなる「われわれ」カテゴリーの性格についての考察である(ibid.: 125-139)。この部分が、エンピリカルな事例の吟味と付き合わされつつ、佐藤の構想する方向に展開されていくなら、それはスティグマ研究にとって一つのブレークスルーになるだろう。

#### 4. スティグマ構成のリソース、系譜学、そしてノーマライゼーション

スティグマ属性の帰属や隠蔽、中和化は、具体的なやりとりとコミュニケーションの場に属する現象である。しかし、そうしたスティグマ化・非スティグマ化や、より一般的なカテゴリー化とアイデンティフィケーション(坂本 2005: 7章)に使われるリソース(材料)はもちろん、その都度的にその場で作られるものではない。そうしたリソースの一つの核は、成員カテゴリー化装置、つまり人のカテゴリーの集合と、その集合の中の個々の人のカテゴリーとセットとして利用可能な(「お母さん」は「やさしい」とか「キリスト教徒」は「アーメンという」といったように)「述部(predicates)」のカテゴリーである。

先に、極論すれば、スティグマ化の指標は何でもいと述べた。しかし、さまざまなやりとりの場で、その場の状況の定義との関連ではあるが、指標としてよく使われているリソースがあるのも確かだ。この点については、さらに突っ込んだ吟味が必要だが、ここではさしあたり、使われやすいリソースをスティグマのカテゴリーと呼び、それを、人のカテゴリーとその述部としての行いや活動や態度や性状や位置づけ等々のセットに、負または否定的な評価が含まれるカテゴリー(「精神障害者」は「こわい」・「危険だ」とか、「性犯罪者」は「再犯の可能性が高い」とか、「有色人種(colored=アフリカ系市民の旧称)」は「怠け者だ」・「醜い」・「無知だ」・「生物学的にみてより低い進化の段階にある」とかいったように)と考えておくことにしたい<sup>xxi</sup>。こうしたリソースは、常識知や専門知識、特定の制度的環境の下で受け継がれるローカルな知識の一部として、個々のやりとりの場で利用可能になるものだが、それらはもちろん、過去のいつかにどこかで形作られたという意味で、歴史的な構成物である。そして、あるリソースの「誕生」と流布には、専門的なディシプリンの学問的・職業的活動が関わっているかもしれないし、人の耳目を集める出来事への集合的な対応の試みや、「社会問題」への政策的対応の努力が関わっているかもしれない。現代では、リソースの普及に、マスメディアが果たす役割も大きいだろう。

前節で述べたスティグマ研究の第四の流れは、こうしたカテゴリーとその背景になる“理論”、それに伴う用語や挿話やシンボルやイメージの、形成や変遷や流布を研究課題にする。この流れの一つの里程標が、コンラッドとシュナイダーの『逸脱と医療化』(Conrad and Schneider 1980)である。コンラッドらは、現代米国社会では逸脱の定義方法が漸進的に変化し、「かつて不道徳で、罪深く、犯罪的であると定義されていた逸脱行動に、医学的な意味合いが付与され」(ibid.: 1)、「医療的な処置が処罰や社会統制の基本的な形態」(同)になってきていると主張する。このような観点から、「狂気」、「アルコール依存症」、「アヘン嗜癖」、「非行・多動症・児童虐待」、「同性愛」、「犯罪」の定義の歴史的変遷が跡付けら



れ、変遷の背景となる定義のポリティクスと専門職支配の貫徹に脚光が当てられる。重要なのは、「科学的」な逸脱の医療化（「ふつうでないもの」の医療の言語と実践の中での捕捉を制度化すること）が、脱スティグマ化を意味しないということである。医療化は、一見中立的な装いを保ちながら、「ふつうでなく不都合なこと」の位置または源泉を個人の内部に同定し、結局、それを発見されれば信頼を失うようなスティグマ属性を制度的に用意する。もちろん、「同性愛」から「ゲイ」へのカテゴリーの転換にみられるように、当事者の運動が牽引車になったアイデンティティ・ポリティクスによって、カテゴリーの脱医療化が起こることもある。コンラッドらは、現代社会における医療化の趨勢を、強力で基本的に不可逆的なものとみなしているようだが、この点については、経験的事例にもとづいて個別に検討をする余地があるだろう。

コンラッドらは医療に焦点を絞ったが、刑事司法や仕事の組織や親族関係など、スティグマのカテゴリーをリソースとして用意する制度はもちろん他にもある。医師や精神科医による診断だけでなく、逮捕や裁判、学校や企業による成員の処分なども当然、オフィシャルにスティグマのカテゴリーを個人に「結び付ける」活動である。そして、刑事裁判における精神鑑定や、児童虐待をした親の処遇へのカウンセリングの導入のように、医療と刑事司法という二つの制度だけをとってみても、入り組んだ知識と活動の（ときにブローカー的）相互乗り入れがある。こうした活動とそれを可能にする知識の重層構造を、現在の知がいまのような形で可能になっている前提としての過去の知を探るといって探求していくのが、系譜学的な言説分析である（Hacking 1995; 赤川 2005）<sup>xxii</sup>。こうした歴史的研究は、スティグマのカテゴリーの了解可能性を下支えする知の地層を掘り下げ、個別のスティグマ現象のリソースの成り立ちや組成や知の文脈を明らかにする。『スティグマの社会学』の刊行以降に、米国でも日本でも、スティグマ現象への捉え方に大きな変化が起こった。アフリカ系市民や米国先住民、女性、ゲイ、高齢者、障害者からセックスワーカーに至るまで、スティグマのカテゴリーと結び付けられているとされる人たちが、「仲間」の運動を組織し、公共的にスティグマのカテゴリーの作り変えや中和化を試み、そして一定の成果を取めたのだ。上のような系譜学的研究（スティグマのリソースの解剖学）は、こうしたアイデンティティ・ポリティクス（たとえば、Corrigan and Lundin 2001）に対して、有効な指し手を提案するところまではいかないにせよ、「視界をよくする」ための助言を提供できる可能性がある。

こうした系譜学的な研究とつながりはあるが、焦点を異にする二つのタイプの歴史的研究の可能性についてもついでに言及しておきたい。一つは、スティグマ的属性を「発見」するテクノロジーの歴史である。知能テストや心理テスト、血液検査、薬物の尿検査、児童虐待におけるレントゲン写真、医学と精神医学の診断マニュアルの編纂から染色体の検査まで、専門的な技術革新によって新たな「しるし」が作り出され、特定のスティグマ属性の可視性が変わっていく（ときには技術革新によって新たに「作り出される」）過程は、フーコー流の問題意識を今に生かした、重要な研究課題になるはずである。もう一つ、「ふつうであること」自体の歴史的变化という、より微妙で、場合によっては調査困難な研究課題も考えられる。たとえば、服装や身だしなみやメイクや歯並び、顔の造作により手をかけるようになるとか、公共の場所に掃除が行き届き美観が尊重されるようになるとか、清潔を保つための努力が以前より払われるようになりそのための技法や商品が開発されとかいったように、表出の「ふつう」はしだいに变化する（戦後日本の生活史を振り返っ

てみれば、表出水準が高まったとっていいだろう）。「ふつう」の変化<sup>xxiii</sup>によって、スティグマのしるしの可視性が高まったり、隠蔽の努力がよりコストがかかるものになったりすることがある。こうしたことはまた、個人や地域の生きられた階層性とリンクする事柄であるかもしれない。

以上のような歴史研究が構想できるとはいえ、しかし、スティグマ属性の無効化や中和化という実践的な課題に直結するのは、ゴフマンを直接継承した、やりとりの場面における隠蔽や開示の研究（前節でいう第三のタイプ）だというのが、筆者の主張である。運動やメディア、啓蒙教育を通じてスティグマのカテゴリーの文化的改変（あるいは脱構築？）が可能だとしても、ごく近い将来にすみやかにあらゆるスティグマのカテゴリーが社会生活から姿を消すとは考えがたい。とりわけ、見かけやコミュニケーションの仕方、日常的なふるまいにおいて「ふつうさ」から浮き上がる「しるし」を伴うスティグマ<sup>xxiv</sup>は、とりわけそれに慣れ親しんでいない人にとって、どうしても目（または耳、または鼻）に入ってしまう傾向がある<sup>xxv</sup>。相互行為レベルでのノーマライゼーション（ふつう化）のための、つまり、やりとりの方法や舞台装置の再編を通じて、スティグマ的なものができるだけ共同の活動や関係の展開を妨げず、ましてや排除の指標にならないようにするための方途を探るといのが、応用研究としてのスティグマ研究のゴールである。ノーマライゼーションは、「ふつうの人」がスティグマを持つ人にしてあげるものというパターンリスティックな見方は、端的に誤っている。当事者自身がしばしば、そうした作業の熟練者である。このことを早い時期に、経験的研究を通じて指摘したのは、『スティグマの社会学』と並行して研究を進め、同書でも言及されているデイヴィスの「逸脱の拒絶——目に見えるハンディキャップがある人によるごくしゃくした相互行為の管理」（Davis 1961）である。

デイヴィスは、目に見える「障害」はやりとり（相互行為）を圧迫しごくしゃくさせるが、そうなったら、それは、「障害」者（handicapped）に、自分がふつうの地位を与えられなかったと認識する根拠になると指摘する。つまり、先の佐藤の分析で描かれたような十全な排除が起こらない場合でも、「障害」のしるしがやりとりの中で阻害的な働きをすることはあるのだ。デイヴィスによれば、「障害」がもたらす脅威は、少なくとも4つある。(1)それはやりとりにおける排他的な焦点になり、(2)表出上の境界を氾濫させる可能性があり、(3)その人の他の属性と不協和を引き起こし、そして、(4)「障害」者と「健常」者の協同の活動の述部（predicators）をあいまいにする（両者がいっしょに何ができるのかを判断しにくくする）。では、こうした脅威に、社会生活に熟達した「障害」者はどう対応するか。かれらは、(1)相手による虚構の受容を足がかりに、健常者に共感できるようなイメージを投射して「ブレイクスルー」をもたらし、次いで、(2)互酬（相互）的な役割取得へ、そしてさらに、(3)「障害」がふつう化（nomalized）された親密な関係を築きいければ「ふつう」を組み替えることへと、段階を踏んで、能動的につきあいを築き上げていく。さまざまなジレンマや困難を伴うとはいえ、隠蔽が不可能な「障害」を持つ者自身によるノーマライゼーションの作業を捕捉したという意味で、この研究は画期的だった。デイヴィスは、(1)逸脱のふつう化の行いが鍵であり、それがどのようにしてうまくいったり失敗したりするかを、もっといろいろ見る必要がある、(2)「障害」のケースは、日常的なやりとりの中での気まずさやその救済の極端なケースである（つまり、私たちが日常的に相互行為を保護するために行う気遣いが、こうしたより困難な相互行為においても、対処のためのモデルになるはずだ）と指摘する。

スティグマの一般理論と同じように、スティグマのノーマライゼーションの一般理論もありえない。個別のスティグマ属性のしるしが「見えやすい」か「見えにくい」かによって、また、やりとりの場面や舞台装置やコミュニケーションの媒体がどのようなものであるかによって、ふつう化のためのやりとりの技法やカテゴリー操作、物理的な条件の改変の方策は、まったく違ったものになるだろう<sup>xxvi</sup>。そうした事柄を調べ経験的に検討することが、この分野の研究者がこれから進むべき道だと筆者は考える。それを前提にしたうえで、しかし一般的なレベルでの脱スティグマ化の議論として唯一成り立つ可能性があると思われる議論を、最後に見ておきたい。

先に見た『差別論』(佐藤 2005)で、佐藤は、その三者関係モデルの論理的帰結として、差別の無効化戦略を提示する。スティグマのカテゴリーがどのようなものであれ、それが「非差別者」に対する見下しと排除の指標になるためには、「差別者」と「共犯者」の同化という過程が不可欠である。いいかえれば、「共犯者」が同化を拒否すれば、排除は成り立たない。同化を拒否するためには、しばしばあいまいな形で提示される同化メッセージを読み取り、それを差別行為として対象化しなければならない。そのためには、『『知っている』が『見えていない』行為(ルール)を『見える』ようにする』(ibid.: 187) ことが必要だが、それを具体化するもっとも有効な手段は言語化、つまり、『『知っている』こと[差別の仕方——筆者]を言葉にしてし』まうことである(ibid.: 188)。佐藤は、こうした差別の方法を対象化した言語表現をワクチンと名付け、“石原都知事「三国人」発言”を応用問題として具体的にワクチンの作り方を示す。かれの議論は、まだ試論的なものではあるが、「われわれ」のカテゴリー化を掛け金とする、やりとりの現場でのカテゴリー操作が脱スティグマ化をもたらす展望を示唆したものとして注目に値する。佐藤の三者関係論にはジンメルのも三者関係論を逆立ちさせたようなおもむきがある。ゴフマンに、ジンメルの形式社会学の継承者といえる側面があることを考えると、佐藤の所説は、ゴフマンのスティグマ論の一つの可能な発展形態といえるかもしれない。このような一般的な分析であれ、あるいは上記のようなより個別的でエスノグラフィックな探究であれ、人びとのやりとりに照準を合わせたアプローチ以外に、スティグマ現象の解明に有効な方策はないことを、この予備的考察の結びとして、再度強調しておきたい。

#### [参照文献]

- Adorno, Theodor W., Else Frenkel-Brunswik, Daniel J. Levinson, and R. Nevitt Sanford. 1950. *The Authoritarian Personality*. Harper and Brothers. (田中義久・矢澤修次郎・小林修一訳『権威主義的パーソナリティ』青木書店 1980.)
- Ainlay, Stephen C., Gaylene Becker, and Lerita M. Coleman. 1986. *The Dilemma of Difference: A Multidisciplinary View of Stigma*. Plenum.
- 赤川学. 1999. 『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房.
- 2005. 「言説の歴史を書く——言説の歴史社会学の作法」盛山和夫・土場学・野宮大志郎・織田輝哉編『<社会>への知(下)』勁草書房 125-144.
- Allport, Gordon W. 1954. *The Nature of Prejudice*. Addison-Wesley. (原谷達夫・野村昭訳『偏見の心理』培風館 1961.)
- Angrosino, Michael V. 1992. "Metaphors of Stigma: How Deinstitutionalized Adults See

- Themselves." *Journal of Contemporary Ethnography* 21: 171-199.
- Blum, Nancy S. 1991. "The Management of Stigma by Alzheimer Family Caregivers." *Journal of Contemporary Ethnography* 20: 263-283.
- Blumer, Herbert. 1969. *Symbolic Interactionism*. University of California Press.
- Burke, Kenneth. 1956. *Permanence and Change: An Anatomy of Purpose*. University of California Press.
- Cahil, Spencer E., and Robin Eggleston. 1995. "Reconsidering the Stigma of Physical Disability: Wheelchair Use and Public Kindness." *The Sociological Quarterly* 681-698.
- Conrad, Peter, and Joseph W. Schneider. 1980. *Deviance and Medicalization: From Badness to Sickness*. [Expanded Edition. Temple University Press. 1992.] (進藤雄三監訳『逸脱と医療化——悪から病へ』ミネルヴァ書房 2003.)
- Corrigan, Patrick, and Robert Lundin. 2001. *Don't Call Me Nuts: Coping with Stigma of Mental Illness*. Recovery Press (The University of Chicago center for Psychiatric Rehabilitation).
- Crocetti, Gino. M., Herzl R Spiro and Iradji Siassi. 1974. *Contemporary Attitudes toward Mental Illness*. University of Pittsburgh Press. (加藤正明監訳・石沢雄司訳『偏見・スティグマ・精神病』星和書店 1978.)
- Crocker, Jennifer. 1999. "Social Stigma and Self-Esteem: Situational Construction of Self-Worth." *Journal of Experimental Social Psychology* 35: 89-107.
- Davis, Fred. 1961. "Deviance Disavowal: The Management of Strained Interaction by the Visibly Handicapped." *Social Problems* 9: 120-132.
- 柄本三代子. 1992. 『『常人—スティグマ保有者統一体』概念、その示唆するところ——Goffmanの『構造』の展開可能性』『ソシオロギス』16号: 87-100.
- Falk, Gerhard. 2001. *Stigma: How We Treat Outsiders*. Prometheus.
- Hochschild, Arlie Russell. 1983. *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*. The University of Chicago Press. (石川准・室伏亜希訳『管理される心——感情が商品になるとき』世界思想社. 2000.)
- Gardner, Carol Brooks. 1991. "Stigma and the Public Self: Notes on Communication, Self, and Others." *Journal of Contemporary Ethnography* 20: 251-262.
- Erikson, Kai T. 1966. *Wayward Puritans*. Wiley.
- Foucault, Michel. 1961. *Histoire de la Folie*. Librairie Plon. (田村椒訳『狂気の歴史——古典主義時代における』新潮社 1975.)
- Garfinkel, Harold. 1967. *Studies in Ethnomethodology*. (山田富秋他訳「アグネス、彼女はいかにして女になり続けたか」(抄訳)『エスノメソドロジー——社会学的思考の解体』せりか書房 1987 所収.)
- Goffman, Erving. 1959. *The Presentation of Self in Everyday Life*. Doubleday Anchor. (石黒毅訳『行為と演技——日常生活における自己呈示』誠信書房 1974.)
- 1963. *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*. Prentice-Hall. (石黒毅訳『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房 1970.)
- 1967. *Interaction Ritual*. Anchor Books. (広瀬英彦・安江孝司訳『儀礼としての相互行為——対面行動の社会学』法政大学出版局 1986.)
- 1969. *Strategic Interaction*. University of Pennsylvania Press.



- Hacking, Ian. 1995. *Rewriting the Soul: Multiple Personality and the Sciences of Memory*. Princeton, NJ: Princeton University Press. (北沢格訳『記憶を書きかえる——多重人格と心のメカニズム』早川書房, 1998.)
- Heatherthorn, Todd F., Robert M. Kleck et al. (eds.). 2000. *The Social Psychology of Stigma*. The Guilford Press.
- Herek, Gregory M. (ed.). 1998. *Stigma and Sexual Orientation: Understanding Prejudice Against Lesbians, Gay Men, and Bisexuals*, Sage.
- Hester, Stephen, and Peter Eglin (eds.). 1997. *Culture in Action: Studies in Membership Categorization Analysis*. University Press of America.
- Herman, Nancy J. 1993. "Return to Sender: Reintegrative Strategies of Ex-Psychiatric Patients." *Journal of Contemporary Ethnography* 22: 295-330.
- 石川准. 1985. 「逸脱の政治——スティグマを貼られた人々のアイデンティティ管理」『思想』736号: 107-126 岩波書店.
- 石川良子. 2003. 「パッシングとしての<ひきこもり>」『ソシオロジ』148号: 39-55.
- Jones, Edward E., Amerigo Farina et al. 1984. *Social Stigma: The Psychology of Marked Relationships*. W. H. Freeman.
- Link, Bruce G., and Jo C. Phelan. 2001. "Conceptualizing Stigma." *Annual Review of Sociology* 27: 363-85.
- Maturana, Humberto, and Francisco Varela. 1984. *El Arbol Del Conocimiento*. Editorial Universitaria. (管啓次郎訳『知恵の樹』筑摩書房 1997.)
- Mason, Tom, Caroline Carlisle et al. (eds.). 2001. *Stigma and Social Exclusion in Healthcare*. Routledge.
- Mead, George Herbert. 1932. *Mind, Self and Society*. University of Chicago Press. (稲葉三千男他訳『精神・自我・社会』青木書店 1973.)
- Miall, Charlene E. 1986. "The Stigma of Involuntary Childlessness." *Social Problems* 33: 268-82.
- Murphy, Robert F. 1987. *The Body Silent*. Henry Holt and Company. (辻信一訳『ボディ・サイレント——病いと障害の人類学』新宿書房 1992.)
- Nack, Adina. 2002. "Bad Girls and Fallen Women: Chronic STD Diagnoses as Gateways to Tribal Stigma." *Symbolic Interaction* 25, 2002: 463-485.
- 中河伸俊. 1999. 『社会問題の社会学——構築主義アプローチの新展開』世界思想社.
- ..... 2000. 「逸脱行為」碓井崧・丸山哲央・大野道邦・橋本和幸編『社会学の理論』有斐閣 125-138.
- ..... 2005. 「逸脱のカテゴリー化とコントロール」宝月誠・進藤雄三編『社会的コントロールの現在』世界思想社 159-173.
- 大村英昭. 1979. 「スティグマとカリスマ——『異端の社会学』を考えるために」『現代社会学』12号: 117-144.
- 大村英昭, 宝月誠. 1979. 『逸脱の社会学——烙印の構図とアノミー』新曜社.
- 坂本佳鶴恵. 1986. 「スティグマ分析の視角——『人間』であるための諸形式に関する考察」『現代社会学』22号: 157-182.
- Peters, William. 1987. *A Class Divided, Then and Now, Expanded Edition*. Yale University Press. (白石文人訳『青い目茶色い目——人種差別と闘った教育の記録』日本放送出版協会, 1988.)
- Pinel, Elizabeth C. 1999. "Stigma Consciousness: The Psychological Legacy of Social Stereotypes." *Journal of Personality Social Psychology* 76: 114-128.
- Pollner, Melvin, and Jill Stein, 2001, "Doubled Over in Laughter: Humor and the Construction of Selves in Alcoholic Anonymous," in Jaber F. Gubrium and James A. Holstein. (eds.). *Institutional Selves: Troubled Identities in a Postmodern World*. Aldine de Gruyter: 46-63.
- 坂本佳鶴恵. 2005. 『アイデンティティの権力——差別を語る主体は成立するか』新曜社.
- 佐藤裕. 2005. 『差別論——偏見理論批判』明石書店.
- Scheff, Thomas J. 1966. *Being Mentally Ill: A Sociological Theory*. Aldine. (市川孝一・真田孝昭訳『狂気の烙印——精神病の社会学』誠信書房 1979.)
- Schneider, Joseph, and Peter Conrad. 1980. "In the Closet with Illness: Epilepsy, Stigma Potential and Information Control." *Social Problems* 28: 32-44.
- Schur, Edwin M. 1980. *The Politics of Deviance: Stigma Contests and the Use of Power*. Prentice-Hall.
- Shaw, Linda L. 1991. "Stigma and Moral Careers of Ex-Mental Patients Living in Board and Care." *Journal of Contemporary Ethnography* 20:285-305.
- Smith, Dorothy. 1978. "K Is Mentally Ill: The Anatomy of a Factual Account." *Sociology* 12: 23-53. [Reprinted in *Texts, Facts, and Femininity*. Routledge, 1990.] (「Kは精神病だ——事実報告のアナトミー」『エスノメソドロジー——社会学的思考の解体』せりか書房 1987: 81-153.)
- Spicker, Paul. 1984. *Stigma and Social Welfare*. Croom Helm. (西尾祐吾訳『スティグマと社会福祉』誠信書房 1987.)
- Suchar, Charles S. 1978. *Social Deviance: Perspectives and Prospects*. Holt, Rinehart and Winston.
- 徳岡秀雄. 1987. 『社会病理の分析視角——ラベリング論・再考』東京大学出版会.
- 鶴田幸恵. 2004. 「トランスジェンダーのパッシング実践と社会学的説明の齟齬——カテゴリーの一瞥による判断と帰納的判断」『ソシオロジ』151号: 21-36.
- 内田良. 2002. 「スティグマの感情——相互作用過程における精神的傷害の二類型」『ソシオロジ』143号: 55-71.
- 上野千鶴子. 1980. 「異常の通文化的分析」『社会学評論』123号: 31-50.
- 山田富秋・好井裕明. 1991. 『差別と排除のエスノメソドロジー——[いま—ここ]の権力作用を解説する』新曜社.

[注]

<sup>i</sup> sensitizing concept. 「『[内容が厳密に定められた] 概念がもつ抽象的な枠組みのなかに事例を埋め込むのではなく、[その内容が大まかな] 概念から出発して、事例の持つ個々の独自の有り様へと至らなければならない』[Blumer 1969: 194] とする概念の“用い方”を指す。(桑原司「ブルーマー『シンボリック相互作用論』」 <http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/>

kuwabara/Blumer-as-Chicago-School.htm / 2006年2月25日参照)

- ii 本章では、やりとり(相互行為 interaction)とコミュニケーションという二つのことばを、まったく互換的に使っているわけではない。『行為と演技』の冒頭で、ゴフマンは、表出(expression)には、人が「意図的にする give」ものと「何気なく、非意図的にする give off」ものがある指摘する。前者は、ことばやその替わりになるシンボルを伴う(狭義のコミュニケーション)。後者には、幅広い行為(ジェスチャー、姿勢、声のトーン、服装といった非言語コミュニケーションや、適切・不適切なさまざまなふるまい)が含まれる(広義のコミュニケーション)。前者は後者を伴うが、前者がないときも後者は存在しうる。品物の売買をするとか世間話をするとかいったやりとり(give and take や exchange より広い、お互いに行為をしようという意味での interaction)において、表情や服装や声のトーンは(ペイトン流にいうなら)「メタメッセージ」になる。しかし、そうしたやりとりがないとき、たとえば自分から少し離れた駅のベンチに座っている見知らぬ人を横目で観察するときにも、その人についての情報の読み取り、つまり広義のコミュニケーションは成り立ちうる。つまり、ここでいうコミュニケーションは、やりとりより広汎な(そして真空を嫌う)現象なのである。
- iii あるいは、初期ゴフマンが影響を受けたケネス・パークの「訓練された無能力」という概念を敷衍して、「見(え)る」ということは「見(え)ない」ということだといいかえてもいい(Burke 1954)。「盲点」(Maturana and Varela 1984)などと事新しくいい立てなくとも、パークを換骨奪胎したゴフマンの演劇論アプローチはつとに、見えないことが見えること、人形浄瑠璃の芝居を見るときには黒衣の人形使いが見えなくなればならないのと同じように、「状況にとって適切」な行いや人の属性(キャラクター!)が見えるためには、「不適切」な行いや属性が見えなくなっていなければならないことを指摘していた。
- iv 状況の定義(definition of the situation)が、その場にいる人たちの間で完全に一致している必要はない(というか、一致しているかどうか頭の中を覗いてみることはできないので、そうした意味での「一致」を論じることに意味はない)。お互いに「定義」をチェックしあい、調整しあいながら、その場での活動がちゃんと進められるという事態、ゴフマンの用語を使うなら実務的なコンセンサス(working consensus)が成り立っていれば、それでいいのである。
- v とはいえ、ゴフマンにいわせるなら、この二つもまた連続体または入れ子の関係にあつて、デュルケム的な前者とゲーム理論的な後者とを画然と二つに分けることはできない、ということになるだろう。
- vi いいかえれば、前者(状況/状況の中の自己/状況の中の活動を「わけの分かるもの」にしようとする行い)は私たちにとって道徳的責務であり、そして後者は、その前者にある意味で寄生した行いなのだと見える。
- vii 外面(表、あるいは前面)は、個人のパフォーマンス中の、固定的、一般的な形でオーディエンスに対して状況を定義する部分、いいかえれば標準化された表出の装置と定義される。この外面の構成要素として、(a)舞台装置 settings、(b)個人的外面(地位ないし位を示す記章、服装、性、年齢、人種的特徴、身体の大きさ、容貌、姿態、言葉づかい、表情、身振り)などが挙げられる。ゴフマンはさらに、(b)を、(b-1)見かけ(appearance)と(b-2)マナー(ものごし、ふるまい方; manner)に区分する。こうした外面の諸要素間には一定の整合性あることが期待されるが、しかし実際には互いに矛盾することもある。
- viii もちろん、ゴフマンは、社会化と役割演技の理想化について論じたくだりで、ミード的な一般化された他者概念の有用性を認めている。ただ、重要なのは、そうした理念化された「見かけ」と行いの基準は、具体的なコミュニケーション状況の中で、具体的な行為者の身体や舞台装置・小道具を使って、具象化(realization; Goffman 1959 邦訳: 34)されなければならないということである。
- ix ゴフマンは、こうした「パフォーマンスの進行中、もしそれらに注意を向けられれば、そのパフォーマンスが人に抱かされている印象を混乱させ、それへの不信を招き、あるいはそれを無用にするであろうような事実」についての情報を、破壊的情報(ibid. 邦訳: 164)と呼ぶ。『スティグマの社会学』における隠蔽や情報統制や秘密や暴露についての議論は、すべてこの破壊的情報の特殊ケースを取り扱ったものである。

- x 「未知の人が、われわれの面前にいる間に、彼に適合的と思われるカテゴリー所属の他の人びとと異なっていることを示す属性、それも望ましくない種類の属性——極端な場合はまったく悪人であるとか、危険人物であるとか、無能であるとかいう——をもっていることが立証されることもあり得る。このような場合彼はわれわれの心のなかで健全で正常な人から汚れた卑小な人に貶められる。この種の属性がスティグマなのである。」(Goffman 1963 邦訳: 11-12)
- xi 映画『招かれざる客(Guess Who's Coming to Dinner)』(スタンリー・クレイマー監督、1968年)にきわめて印象的な例がある。
- xii こうした一種のエコノミーのルールに従わないかぎり、私たちは円滑に日常生活をいとなむことができない。
- xiii ゴフマンが、特定のやりとりの局面の中で達成されるヴァーチャルなアイデンティティと、その人が実際にはそれを持っていると明らかにされうる(could in fact be proved to possess)アクチュアルなアイデンティティという二段構えで論じているのは、大略こういうことである。
- xiv これはしばしば、「常人」よりもむしろ当事者においてより痛感されることである。「さらに悪いことに、身障者は自分の障害について自分を慰めるだけではなく、人間関係をうまくやっていくためには、自分の障害のことで障害のない者たちをも慰めてやらなければならない。自分の恐れを、悲しみを、憂うつを、性的な感情を、そして怒りを、障害のない人々の前でみせて彼らの心の平和を乱すようなことがあってはいけぬ。病んだからだは笑うことだけを許されているのだ。その他の怒りだの憎しみだのという感情は人前では封じ込め抑えつけておいて、どこか舞裏で人知れず爆発させねばならない。私は一日の積もり積もった憤懣を我が家の舞台裏で吐き出す。ヨランダ[妻]にはいい迷惑だ。だが彼女にも私の絶望や恐怖の全部をぶちまけるわけではない。」(Murphy 1987 邦訳: 142-143)
- xv こうした研究の多様化を反映して、スティグマ研究の論集には、複数のスタンスからの研究が盛り込まれがちである(たとえば、Ainlay 1986; Henderson et al. 2000; Mason et al. 2001)。
- xvi 逸脱の反作用的定義(たとえば、徳岡 1987 参照)という道具立てが、その基盤になった(しかもその定式化が不徹底だったために、最近までそれが方法的論争の火種になっている)。
- xvii こうした議論の筋道を、ゴフマンの保守性や差別意識の表れだとみる(たとえば、山田・好井 1991: Scene 4)のは誤りだろう。ゴフマンは、よい社会学者や人類学者がそうであるように、人びとがしていること(games people play)を捕捉しようと努めているにすぎない。
- xviii ガーフィンケルは、ゴフマンのパッシング観は、以下のような想定にのっとっているから、ゲーム・モデルだと批判する。(1)始まり—終わりといった特有の時間的構造、(2)プレイヤーはゲームを「やめられる」、(3)ゲーム内では「シリアス」な生活における前提や手続きは一時停止される、(4)ゲームにおける生活史はそのゲームのプレイに関わるものに限定される、(5)ゲームにおけるエピソードの連鎖は、関連性(relevance)の構造によって連結され、全体的な性格を帯びる、(6)ゲームでは、成功と失敗がはっきり決められる、(7)ゲームの規則によって、適切かつ「フェア」な行為が定義される、(8)ゲームのプレイは即興的だが、しかし、プレイヤーはゲームの基本的規則を知っている、(9)プレイヤーは、自分も相手もが、規則に依拠してもっとも手段的に有効な手を打つと想定して、ゲームを進めることができる(Garfinkel 1967 邦訳: 252-254)。
- xix この意味で、異常の構造主義的分析(上野 1980)や、デュルケムを拡大解釈した逸脱の境界維持機能論(Erikson 1966)に見られるような論理構成は、実際に立ち現れるスティグマ現象を決して捕捉できないという致命的な限界を持つ。
- xx (1)利害関係主導型差別と、(2)同化主導型差別、および、(2)のサブタイプとしての(i)攻撃的排除と、(ii)象徴的排除(佐藤 2005: 72-82)。
- xxi これは、単なる偏見のいいかえにみえるかもしれないが、集合やセットといった解析的な道具立てと、そして何より、具体的なやりとりの中で状況の定義(あるいはエスノメソドロジ的にいえば実践的関心)にそって相互反映的な形で使われる材料としてのカテゴリー化装置という基本的理解によって、人びとの実際のやりとりを捕捉するという目的にとって、固定化された偏見概念よりも格段に性能のよいものになっている。
- xxii こうした言説分析の歴史研究を、さまざまな歴史的時点における特定のリソース(言説)

の利用可能性 (availability) を明らかにする作業として定式化する論者もある。たとえば歴史研究の言説分析は、(1)言表行為の痕跡の総体としての言説空間における諸言説のパリエーションの明らかにする、(2)そうした言説のパリエーションの同時代の言説空間における分布を明らかにする (これによって、なぜの問いに答えられる)、(3)現在の言説の分布に至る歴史の変容を記述し説明する (赤川 2005: 131-2)、といったように。たしかに、その時点で存在しない (だれも知らず記録もない) リソースを使用することはできないが、リソースの利用可能性によって、相互作用的现象 (たとえばスティグマの開示や発見) を説明することはできない。リソースの存在とはリソースの具体的使用であり、その使用から独立に、リソースの分布を「測定」することはできない。

xxiii ホックシールド (Hockschild 1983) がいう感情管理の水準の変化なども、こうした視点から再解釈することができるかもしれない。

xxiv マーフィーは、こうした身体的な「障害」を逸脱と併せて括るという点でゴフマンのスティグマ概念は不適切だと批判し、「障害」がもたらす回避感情を別途に、V・ターナーのリミナリティ (境界状態) やM・ダグラスの「穢れ=分類から外れたもの」という定義で説明しようとした (Murphy 1987 邦訳: 171-176)。

xxv 「常人」の参加者が「目 (または耳または鼻) に入るのは当たり前だ」と開き直ってはもちろんいけないが、しかし、「目 (または耳または鼻) に入るのは差別意識の表われだ」という非難や自責もまた、あまり生産的ではない。

xxvi 隠蔽と開示だけでなく、開示しながらやりとりをスムーズに運ぶために行われるカヴァーリングや、選択的開示 (秘密の共有) の戦略的位置、自助グループなどでの個人的アイデンティティからのスティグマ属性の切り離しの儀礼的作業 (たとえば、Pollner and Stein 2001) といった重要な研究課題もあるが、本稿では触れることができなかった。